

社会体育専攻学生の友人関係における 話題と契機についての調査研究

—とくにその生きがい感とのかかわりから—

○ 蔦田倫子 (余暇問題研究所)

西岡英則、山崎律子 (余暇問題研究所)

キーワード：生きがい感、友人関係、レジャー行動

I 緒言

個人のレジャー行動が友人関係とくに友人との交流に大きく左右されることは、経験的に周知されているが、その仕組みについては明らかではない。一方従来の若者の生きがい感調査でも、生きがい感のトップが、友人や仲間との交流となっている。しかしその内容については解明されていない。したがって生きがい感と友人関係の仕組み、およびレジャー行動とのかかわり、さらに、これらの相互関係を追究することは、レジャー・レクリエーション研究にとって不可欠かつ意義あるものと思われる。

本研究は、このような視点から、今回とくに社会体育専攻学生を選び、教育の基礎資料を得ると同時に、将来レジャー・レクリエーションの分野に携わる学生の生きがい感を再検証し、友人関係における話題内容、契機などを解明しようとした。

II 研究目的

今回の調査研究の具体的目的は、上記の第一段階として次のように定めた。

1. 社会体育専攻学生の生きがい感の再検証
2. 上記学生における友人との話題およびその内容の把握
3. 上記学生における友人に会いたくなる契機の把握
4. 生きがい感と話題、契機などの関係の検討

III 研究方法

調査対象：東海大学体育学部社会体育学科1年次学生90名（対照群として、同大学理学部数学科1年次学生91名も調査した）

調査期間：1991年2月10日～15日

調査方法：質問紙法により、授業時に実施その場で回収

回収率：100%（有効回収率97.2%）

分析方法：単純集計、クロス集計および一部因子分析

IV 主な結果と考察

1. 生きがい感の再検証

生きがい感については、選択肢21項目（日本生産性本部、総理府調査などを参考にして設定）において、3項目までの複数回答式で実施した。その結果、「スポーツにうちこんでいるとき」（68.9%）を筆頭に、「親しい異性といるとき」（57.8%）、「友人や仲間といるとき」（47.8%）の順となった。数学科学生の結果も、「友人や仲間といるとき」（54.7%）を第1位にあげたほかは、その差はみられなかった。また、日本生産性本部で毎年実施している結果とも同様であった。

2. 話題とその内容

話題とその内容については、30項目の選択肢において、それぞれ 1) 多い話題、2) 楽しい話題、3) つまらない話題に分け、3項目までの複数回答を求めた。多い話題と楽しい話題は相互関係があり、楽しい話題とつまらない話題は表裏の関係があると思われるが、以下のような結果が得られた。(上位3項目までをあげる)

多い話題・・・①恋愛や恋愛問題について(42.2%) ②自分たちのスポーツについて(36.7%) ③異性のことについて(36.7%)

楽しい話題・・・①異性のことについて(46.7%) ②恋愛や恋愛問題について(38.9%) ③友人や仲間のことについて(37.8%)

つまらない話題・・・①宗教問題について(60.0%) ②科学について(41.1%) ③学問や研究について(25.6%)

数学科学生についても、ほぼ同様な結果となった。しかし多い話題については「自分たちのスポーツ」に代わって「自分たちの趣味について」が第3位になっている。またつまらない話題では「宗教問題」に次いで「政治経済」「時事・社会問題」などがあげられた。

3. 友人に会いたくなる契機

ではなぜ友人に会いたくなるのかを、28項目について5段階チェックで回答を求めた。平均スコア4点以上の項目は次のようである。すなわち、「共感することが多い」「遠慮や気兼ねがない」「安心感がある」「気楽さがある」「いろいろな情報が得られる」「たわいなく楽しめる」などであった。さらにこれらの因子抽出を試みたが、累積寄与率が、62.4%に止まったのでこの試みを棄却した。しかし「気まま・自己本位」「情報交換」「ストレス解消」などと命名できそうな傾向にあった。

4. 生きがい感と話題、契機の関係

生きがい感の相違と話題との関係を求めてみたが、少なくとも上位3位までは差がみられなかった。また生きがい感と友人に会いたくなる契機との関係では、「スポーツにうちこんでいる」ことに最も生きがいを感じている者と、「友人や仲間といる」ときのに最も生きがいを感じている者とは、後者が「ゆったりした気分」「暇つぶし」「淋しさを感じない」「連帯感がある」などで高い得点を示した。

V 要約

1. 生きがい感については、社会体育専攻学生は「スポーツにうちこんでいる」ときに、最も生きがいを持つのは当然としても、数学科学生や日本生産性本部の“働くことの意識”にみられる結果(友人や仲間といるときに生きがいを感じている項目が第1位)と大差がないことは、やはり現代青年(18・9歳)の一般的傾向と変わらない。しかし、大学の講義や専門的勉強、クラブ活動に反応を示さないことなどは、今後の大学教育の在り方に示唆を与えるものである。

2. 話題や友人に会いたくなる契機をみても、異性、恋愛、仲間のこと、また気ままに、暇つぶし、ゆったりした気分など、いわば井戸端会議的な友人関係は、現代の傾向としてそのまま受けとってよいのだろうかという疑問の残るところである。

3. 今後は、これら友人関係のより詳細な分析と、友人関係のレジャー行動に及ぼす影響を解明していきたい。